

“予測を超える神の恵み”

(新約聖書ルカによる福音書) 19章1節～10節

1節～それからイエスは、エリコに入って、町を御通りになった。

2節～ここには、ザアカイと言う人がいたが、彼は取税人の頭で、金持ちであった。

3節～彼はイエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見る事ができなかった。

4節～それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。丁度イエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。

5節～イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。『ザアカイ。急いで降りて来なさい。今日はあなたの家に泊まる事にしてあるから。』

6節～ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。

7節～これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客となられた。」と言ってつぶやいた。

8節～ところがザアカイは立って主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財布の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取ったものは、四倍にして返します。」

9節～イエスは、彼に言われた。『きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子ですから。』

10節～人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。』

イエス(誕生時の名前)・キリスト(メシヤ=救い主と言う職名)というお方は、旧約聖書時代、キリスト降誕より400年以上前に、イザヤという預言者の預言で語られていた“メシヤ=救い主”で、このお方は、天地の創造者である神(天地の創り主・全人類の永遠の神)が、その造られた全ての者に、ご自身をお示しに

なられるために、人の姿を摂られて、世に顕れたお方なのです。 一時的ではあれ、一度この世（歴史）に顕れたことは、歴史に記録され、当時人々との出会い・体験・交わりによって、記録され、その事実が伝えられて、今日の到っているのです。 このイエス・キリスト様を通して、父なる創造者である神を信じる人々が、クリスチャンと呼ばれており、自らも“クリスチャン”と、自覚して生きる日々を感謝しているのです。 “クリスチャン”と言う意味は、“イエス・キリストによって、(各自自分の) 造り主である、父なる神のいのちに繋がる者”という意味なのです。

さて、今朝のこの短い物語は、メシヤとして来られたイエス・キリスト様が、多くの人にご自身をお示しになられるために、人々の中を行き巡っておられた時の一つのエピソードです。

① 群衆の期待したもの

※“ザアカイ”と言う人物について、少し予備知識を示しておきましょう。 テキスト本文にもあるように、彼は、取税人（税金徴収官）でした。 当時のユダヤ（パレスチナ）は、大ローマ帝国の支配下にあり、支配政府の雇われ役人として、同じ民の上に立って、税金を徴収する役人でした。 当時の多くの主税官は、民衆から嫌われるので、腹いせに政府の徴税額に上乗せして、徴収したり、貧しい者からは、神の律法にも禁じられている、夜具や生活必需品さえも、差し押さえて徴収する、嫌われ者だったのです。 そのため、孤独で、味方はなく、孤立した生活を強いられていたのです。

そのザアカイが、群衆に紛れて、群衆に紛れて、秘かにイエスに逢いたい（そっと垣間見るだけでも…）と、群衆に紛れて、出てきていたのです。 群衆は興奮して通りを通られるイエス様に心奪われて、誰もザアカイには気付かなかったかもしれません。 しかし彼は背が低く、イエス様を垣間見ることにすらできずにいた時、低い枝を張っている“イチジク桑の木”を見て、これに登り、イエス様を上から見下ろそうとしたのです。

ザアカイは、イエス様と会話したり、特別に声をかけられることを望んでいたわけではないのです。彼はユダヤ律法からすれば、異端者だし、神の恵みに触れるなど、及びもつかないものだとして自認していましたから。

一方、多くの群衆は、ローマの圧政にあえぎ、いつも恐怖と隣り合わせで、抜け出せない圧迫の中に日々を過ごしていました。イザヤの予言にある“メシヤ”の到来を期待しながらも、何の兆候も見られないまま時間が過ぎゆく日々に、希望も慰めもなくしていたのです。そんな時に顕れたイエスキリスト出現は、暗黒の日々に光が差す出来事でした。そのお方がエリコの町に来られるのですから、彼らの心は期待と喜びに打ち震えながら、この日街に繰り出していたのです。

②主イエス様が探しておられたもの

今日のテキストの物語で、注目するところは、ザアカイの突飛もない行動・その原動力となった孤独感からの仰天発想…と言う事ではないのです。その様に、人の熱い思いや、独創的な熱い行動が、大切だ…と言う事ではないのです。ここで最も重要なポイントは、イエス様が、予告もなして、ザアカイのいる木下に来られて、お声をかけられた…と言う事です。もっと言うなら、イエス様がエリコの町に来られたのは、ザアカイのためであった…と言う事です。ザアカイは、人の評価で言うなら、彼は自業自得…と言う状態の中で、苦悩しているのです。人間関係の中では、何の同情も、憐れみもかけられる理由のない、隅に吐き捨てられた存在だったのです。彼の不正のゆえに、多くの市民(同胞)が苦しんでいると言う現実の中で、誰も彼に心向ける事はなかったのです。イエス様の目は、期待し止まない多くの群衆にではなく、この町でもっとも疎外されている、信仰の香りも期待もない、世俗臭そのままの“ザアカイ”一人に向けられたのです。

何故？…ザアカイは、誰ともつながりがなく、一人苦悩し、自分には救いはない、しかし彼はイエス様を一目見たい(この願望の中に、救いを求める

必死な)求道心が生きていたのです。それに比べて、群衆は、物見高く集まっては来ても、自分の問題として、現実を直視はしておらず、何かおこぼれ頂戴的な心理で、烏合の衆となっていたのです。

主イエス様が求めておられるのは、“ザアカイ”だったのです。希望も、可能性も見失った迷える子羊だったのです。主イエス様は、エリコのザアカイを既にご存じだったのです。

③ 主イエス様が見いだされた者

それはエリコの町の人々ではなかった。エリコの中で、誰も気にも留めず、天涯孤独(…だからではない)、真実救いを求めていたもの。今の自分は神の前に何も無い、虚しい存在…だ！と言う事を、実感して悔いている者だった…と言う事です。

(わたし“力丸”が、罪の海に沈み、絶望のどん底に打ちのめされて、

最早救いは私にはない…と、絶望していた時のように…)

救い主イエス様は、その様な人(あなた)を、探して見出して下さるのです。群衆の中の一人(取り得のある)ではなく、心の深い所で、自分でもわからずに、真実を求めているあなたを、主は捜しておられる…と言うのです。

“救い”と言う、神のいのちの恵みは、求めて得られるのではないのです。創造主である神と、神の御子イエス・キリスト様が、与えて下さる“救い”なのです。イエス様は、このテキストの最後に…

『人の子は、失われた人を捜し救うために来たのです。』

創造されたお方あなたの下から離れ、創造主の恵みを知らずに歩む、あなたに、神があなたを創造された本来の恵みの数々を、回復させたと願われて、あなたを捜しておられるのです。『きょう、救いがこの家に来ました。』

「イエス様、私がここにおります。私はあなた以外に私の心(魂)を癒やして下さい。お方はあなた以外にはありません。あなたの十字架の血で、私を洗い、聖くしてください。イエス様の聖名に寄ってお祈りします。アーメン！」